

甚大な霜害を受けた渋柿の着果・新梢管理方法

山形県庄内総合支庁産業経済部農業技術普及課産地研究室

研究のねらい

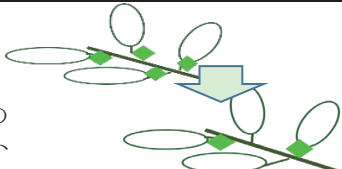


令和3年4月10～11日の降霜により、渋柿（庄内柿）の芽枯れが発生した。一部地域では8～10割の芽枯れが生じるなど甚大な被害となり、早急な事後対策技術の検討が必要であった。そこで、甚大な霜害を受けた渋柿の着果・新梢管理方法を明らかにする。

研究の成果

甚大な霜害を受けた渋柿は、芽枯れにより花数が減少するが、以下のとおり着果・新梢管理（表1）を行うことで、管理しない場合と比べて品質が向上し、正品収量も3割程度向上する（図1～2）。

- ① 通常より遅めに管理し、主芽の新梢生育および生理落果を抑える。
- ② 摘蕾(花)は、新梢の伸長が停止する頃(6月)に実施し、1結果枝当たり2蕾(花)程度残す。
- ③ 新梢管理は、6月下旬～7月上旬、7月下旬～8月上旬の2回に分けて実施する。
- ④ 摘果は、1結果枝当たり1～2果の着果とし(図2)、奇形、変形等が判別できる7月下旬以降に行う。

表1 甚大な霜害を受けた渋柿の着果・新梢管理方法

	摘蕾(花)	新梢管理	摘果
管理項目	通常より遅めで新梢停止の頃(6月)	通常より遅めで2回に分散 〔1回目:6月下旬～7月上旬〕 〔2回目:7月下旬～8月上旬〕	通常より遅めで奇形、変形が判別できる頃(7月下旬以降)
管理のポイント	 <ul style="list-style-type: none"> ・蕾(花)が多い部分を摘蕾する。 ・違う方向の蕾を2個程度残す。 	 <ul style="list-style-type: none"> ・通常より多く残す。 ・樹冠内部の徒長枝を間引く。 	 <ul style="list-style-type: none"> ・奇形、変形果等を中心に摘果する。 ・着果が1果の場合は奇形果でも残す。

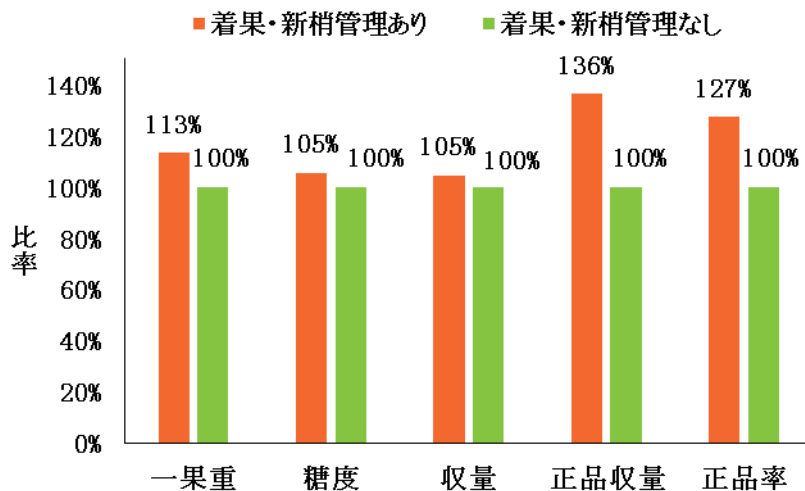


図2 結果枝当たり2果着果の状況(9月24日、収穫始期)

図1 着果、新梢管理の有無による品質、収量の違い

問い合わせ先：園芸研究担当 TEL:0234-91-1250 e-mail:yshonaisanchi@pref.yamagata.jp